インドの統一国家の成立

前５世紀頃に成立した仏教は、当初順調には広がらなかった。しかし、マウリヤ朝のアショーカ王が王が仏教に帰依したことで、その教えが少しずつ広まった。続くクシャーナ朝では、仏教の新たな形として大乗仏教が登場し、その理論が固められていった。

○ 統一国家の成立

●都市国家の誕生

前６世紀頃、南アジアで城壁に囲まれた都市国家がいくつか誕生した。

⇒コーサラ国、そしてそれを併合した(1)＿＿＿＿＿＿＿＿が有力となった。

◇ガウタマ＝シッダールタ

…コーサラ国や（１）を中心に教化と伝道を実施

コーサラ国・マガダ国

●マウリヤ朝の成立

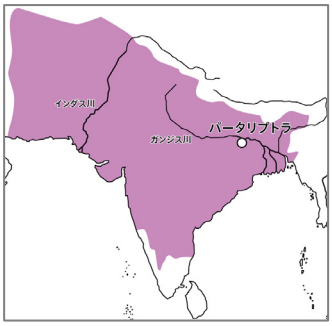
前４世紀、(2)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿がインダス川流域まで遠征した。

⇒（２）の侵入を受け、インドに統一の機運が生じた。

↓

前４世紀末、(3)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿が、マガダ国を倒し、インド最初の統一王朝(4)＿＿＿＿＿＿＿＿を建てた。

⇒（３）は、首都を(5)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿に置いた。



アショーカ王時代の
マウリヤ朝の領域

●マウリヤ朝の最盛期

マウリヤ朝は、(6)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿の治世下で最盛期を迎えた。

→（６）は、征服活動で多くの犠牲者を出したことを悔い、仏教に帰依し、(7)＿＿＿＿＿＿（法、社会倫理）による統治を目指した。

⇒（６）は、(8)＿＿＿＿＿＿（編纂（へんさん））や多くの布教師を周辺の国々に派遣した。

アショーカの獅子柱頭

○ 大乗仏教の登場

●クシャーナ朝（１～３世紀）

マウリヤ朝が衰退すると、インドには他民族が侵入を続けた。

→１世紀、イラン系遊牧民クシャーン人がインダス川流域に(9)＿＿＿＿＿＿＿＿を建てた。

⇒２世紀半ば、クシャーナ朝は(10)＿＿＿＿＿＿＿＿の治世下で最盛期を迎え、現代のアフガニスタンからガンジス川中流までを支配した。

＜クシャーナ朝の交易＞

クシャーナ朝は交通路の要衝にあり、国際的な経済活動が活発だった。

⇒ローマとの交易が盛んで、大量の金がインドにもたらされ、ローマの貨幣を参考にして大量の金貨が発行された。

カニシカ王の貨幣

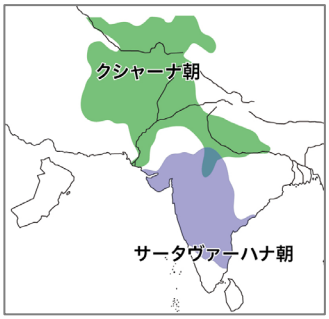
●サータヴァーハナ朝（前１～後３世紀）

クシャーナ朝と並ぶ勢力として(11)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿であった。

⇒サータヴァーハナ朝は、インド北西部からインド南部に勢力をもった。

＜サータヴァーハナ朝の交易＞

サータヴァーハナ朝とローマとの交易もみられた。



クシャーナ朝・
サータヴァーハナ朝

●大乗仏教

従来の仏教は、厳しい修行をおこなって自身の救済を求めるものだった。

→これに対して、自身の救済とともに人々の救済を目指して修行する

(12)＿＿＿＿＿＿＿＿が広まった。

⇒この信仰をもつ者は、自分たちを「（人々を救う）大きな乗り物」という意味で

(13)＿＿＿＿＿＿＿＿と呼び、従来の仏教に励む人を小乗仏教と蔑称した。

◇小乗仏教

…大乗仏教からの蔑称のため、自らは上座部仏教と自称（「長老の教えを伝える者」の意）

＜大乗仏教の理論固め＞

(14)＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（＿＿＿＿）は、空の思想で大乗仏教の理論を固めた

◇空の思想

…全て存在するものは固定的な不変の実体をもたないとする考え

●仏教とヘレニズム文化

従来ガウタマ（仏陀）は、恐れ多いものとして、具体的な像が造られなかった。

⇒(15)＿＿＿＿＿＿＿＿文化の影響をうけ、インド北西部の(16)＿＿＿＿＿＿＿＿を中心に、

仏像・仏教美術が生み出された。